

寛政三亥年略下

釜雜載

〔大江俊矩記〕文化四年四月廿六日戊戌、三升釜壹ツ新調但し少し遣イ代七百文之内、此方之古釜百三拾文ニ下負ニ取候也、河原町通三條上ル金屋源助方也使万介、

〔拾芥抄上本〕釜鳴怪部

子日愁事 丑日喪事 寅日官事凶 卯日家喪事 辰日家亡 巳日中吉來

午日鬼神來 未日口舌事 申日同上 酉日同上 戌日大凶 亥日小吉

〔百練抄後十五〕寛元四年二月七日丁卯、大原野祭也、辰時同社釜吠、其聲遙聞云々、

〔更科日記〕此おのこのいでいりしありくを、おくの方なる女ども、などかくしありかる、ぞとふなれば、いなや心もまらぬ人をやどしたてまつりて、かまはしもひきぬかれなば、いかにすべきぞとおもひて、えねでまはりありくぞかしと、ねたると思ひていふ、きくにいとむくくしくおかし、

〔醍醐寺雜事記〕大治四年六月日、依座主權律師定助勸權中納言源雅定釜一口十石納施入醍醐寺大湯屋

〔西鶴織留三〕何にても智慧の振賣

ことしの暮には達者なる男が釜みがきにありきける、大釜五文、其外は大小によらず二文づ、なり、

〔今様職人盡歌合下〕鑄物師

釜どもよくみがきつくろひて候、かくて湯しまよし町のあたりもちゆきてうり候てん、

〔倭名類聚抄十六〕鼎器 説文云、鼎都挺反、與頂同、和名阿之賀奈倍 三足兩耳、和五味之寶器也、

〔事物紀原八〕鼎什物器用